熊野磨崖仏（くまのまがいぶつ）

前方には険しい山道があり、ここを 20 分ほど登っていくと、熊野磨崖仏と呼ばれる石造の仏像にたどり着きます。ですがハイキングの前に、この道がどうやって作られたかを語る地元の民話をお聞きください。次のようなお話ですので、登りながら思い出してみてください。

昔々、村の近くに住む赤鬼が、人間の肉を味わいたいと思うばかりに目を覚ましてしまいました。赤鬼は地元の神である権現様の元へ行き、飢えを満たしたいのだがよろしいかとお許しをうかがいました。権現様は、出来ないであろう無理難題を言えば赤鬼もあきらめるだろうと思い、こう言いました。「夜明け前までに山腹に百段の石段を築くことができたら、お前の願いを叶えてやる。」

赤鬼は喜び勇んで、さっそくあらゆる大きさの石運びに取り掛かり、手あたり次第に石を積み重ね、石段を造っていきました。休みもせず、おいしそうな人間の肉をたらふく平らげる自分の姿を想像しては元気を出して働きました。

真夜中近くになると、権現様は鬼が任務を終えてしまうのではないかと心配になり、山まで見に行きました。権現様が山に着くと、体は疲れているが気持ちは元気満々といったところの鬼が最後の石を山の上に運んでいる姿が見えました。この石を置いてしまうと、百段目の石段が完成してしまいます。

権現様はこれは大変と、赤鬼の成功を妨げる方法をとっさに考え出しました。夜明けと共に鳴くニワトリの声をまね、「コケコッコー！」と大声で叫んだのです。

慌てた鬼は、締め切り前に任務を果たせなければ権現様に殺されてしまう、という恐れから最後の石をほっぽり出して逃げていきました。鬼の餌食になる寸前だったことなど夢にも知らない地元の人間たちは、何事もなかったかのように暮らしを続けました。また山を登るときにはいつでも、赤鬼が築いた見事な石段を利用したのでした。